

想丛著聞奇集

三

三四〇

想山著聞集卷之三

目録



元ニ大師故生冰叛の不思議の事

墓ノ怪虫の事

戯り大法囊と賣る其病氣の後り起りする事

附大法囊の事

符人異女リ逢うる事

七色の消死人と極死事

天色火のぬく成ゆる事

油と寢れ女の事

大蛇の事

金と渴うる概念死後去無くなる事

英陰盜洞氣をあつあり事

一ひきか堵主に化する事

英縫因めり事

一電の障り事

元三大師 漢生水教の不思議の事

に川添井郡二河村のむか家寺とひハ天台宗より迎年  
色衣の列と飯は前ハ元ニ大師漢生の地たり幸堂古  
二重造み則え三大师の像と安置せり堂のあり  
井戸毛元ニ大師の漢生水之名の井のめぐらして深き  
六尺あまり水をたどり渴えまことに清潔あり  
は井昔うり倒して毎年七月よ冰と陰へうるにあ  
引る牛廻すを板み七種うちもどりて年によりて  
十種ゆきり出る時もありそ教の出ると朝きて金止  
とめりとぞ江戸市谷自謹院の常徳阿闍梨文政年同信誠  
院敷あり比叡山ノ唐門に法船よりとりて彼寺寺  
は草庵見ゆたりとく僧きり故義を親ぢる

井に洗席あひ出るのよハ前ノイヒト同滅。リ  
支々一年後するねりとゆきりつるを新教なり  
は教の多寡よつても年の豊凶と教るとして毛利  
農兵ハは教と侍とてとぞ吉氏の云ふと旨漢生  
備前守長政の兵糧倉との山奥長政兵糧倉の跡  
今も三里程山奥よき處ま倉の教地中とくざりあひ井戸山奥のものとて  
キ又は教り本思議のゆきり年々の教は寺と號へ  
置りとぞ教の本うまととくのものとて他前一移  
教を二日のうちにあひとて消失することをハ教くためとする  
事すとん見ゆくハ何共量りかと事よ根柢とぞ  
後うきうり一奇事なり

藝の怪也なる事

瞻除の怪虫がりの事と童蒙とある事こそい體と  
謂ふる事とおもひて吸い放の名と根の木と葉  
草の木と已と動さゞて根下へ落つハひきのちも葉  
ゆゑて或と被捨故の類としゆく嘗て事と云ふ人某  
初本づく様とあざめどもそりまう不思議の事と  
笑ふる故記ぬ文政元年寅頃の事と覚えず也而を  
攝州佐用郡佐用村の醴原と云ふ處の裏庭と養と  
融とすらへ凡二尺餘と聞ちく良くあみと食辰と  
向り融の内より白と緑の二色と物出と養の内に入  
次第に融弱りたる景色と見り融と死と云ふと  
不思議形の事と融の血と吸うと赤と云のねうちと  
魚とて白と云のあと吸うと白と云と吸乳する



思ひる色を溪田廣の属中多用其作用高の通あ乎極  
ソホの陣應活の表現アリ見得アリ其國人アリ亟ニテ  
キム出アリ平氣アリ佐用  
與六十丁頂ヒ

或へば筆記と見アリ是と全一圖活字下總の書佐原  
の事例アリ於一處其本のアリ有モトトニ垂一處  
居ルお前けかよ御アリ於の身緒モトウジマツシ  
口リ向う縁のアリ事との如く垂には一處良夢又  
一處之次中に繕り丈ナリに覺アリとノ松の事  
諸國も邂逅アリ其事と見えてアリ所とちるより  
是アリ

又得野伊川院生草或時後右の初燒の油細虹のアリ  
御アリ後アリ先ハ此何然事と驚く然見ミバ彼細

あと城の浦を間二三餘り一向の板のトロ版垂の  
にへまると見え毛うらもぬ養うらひとめう  
との奉現り左先金の空印の御人の詔  
又備前尾山彦の屬軍行家の小児年七半りすく  
或自着合つて難い夢仲ゆきと注出一注  
止ハ又注出にて何の病めや毎(難)何よせよ寫序  
毛毛へ毛毛で毛毛り難い便也行するに古藏の  
禮の而より毛毛大燃出うる毛ハ怪ゑと思ひ眺美  
毛毛と奥ゆく小児毛と注出一頃大毛支うて  
毛毛毛止毛どか何毛を懐若草う毛バ毛年毛  
大毛燃出毛か志毛眺め所と又注出と火燃毛  
ううち毛と等一又小児毛と注出一毛不需

思ひ毛毛大と持行一毛と見るに小児の  
氣毛や毛と様毛柔毛と極一裏解の毛と  
捨へ毛り毛の中毛何毛埋り毛根毛故始滅り  
暴とえぐる行毛一毛實毛たる便毛埋毛  
は養死毛とや毛と行毛と毛と毛と  
釘と板葉毛と樂一政毛り毛と毛と後毛小児の注毛と  
熱と毛く涼く常時小復一毛と毛と毛の多  
の又毛と時牧村木と名毛と毛山彦の屬軍と毛  
す毛時現り毛奇と知毛と時毛新に毛と毛と  
多面の毛り一毛り究年五六十毛と紫毛の毛ゆ毛  
天明う寛政う和の毛と毛も候毛の事也  
相版垂の候うの事と記す毛事ハ亟と見ゆう毛

どと耳裏みみに隨意まよひに記のり も故ゆゑを以もつてと爲なすと  
ゆゑ金文きんもんと掛出かげしゆつ——後あとに載のせぬ

搬養はんようの性たごの事こと 費お使つかふをなすと搬養はんよう別種べっしゅ成事なまこ  
當中とうちゆうめ——圓臺えんたいの傍そばりくるハ瓶程はいぢゆうの性異せいぎ者ものより今うり  
起おきく文字を見むる多おほく也よとも傳つたふものと爲なすと既すでり  
もハモ馬心氣裹まじんき——疎さうに枯骨かくこつと仰あおり人間ひとと又床下ゆかしたに  
養な候まつ——毛家けいの入い者もの——養なへ以もつて本もと仰あおりある事こと  
家いえに住する人ひと——煩うきひ——氣血きけつ裏うら——に或日ひ舊きうす  
極きわどみて來くわり——行ゆきの事ことを以もつて極下きわ——死死——行ゆき清きよ  
かかきき或もを猫ねこ馳はしの類たぐい極きわ深ふか——とづきて——引ひへ——極きわ引ひ——  
入りいりああかかもも——が本もと放はなく者もの——故ゆゑ主しゆ不思議ふしき小ちむむい  
魔まと雜ざつ——極下きわ——入い家いえ——なるに大おほき仰あおる養な窟くつりり——  
よ

往居うき——毛髮枯骨もうめいかくこつの軋轢せきりも傳つたふ者もの——故ゆゑ全まつ身みの  
仕業わざ——被はうとお教けい——捨すて——床下ゆかしたと掃除そうりす  
——彼かれ腐く人ひとと目めよ憎にく——平ひら壯年じょうねんの因いん西にし之の係くわい  
の牧野まきの——毛家けい——英體えいたいのよき處面しゆめんと詠よか居ゐ——  
春はるの事こと——圓臺えんたい——又射さる毛虫石けいじゆのとと送おひ居ゐ——  
——極きわトとり養な出だ——右毛虫けいじゆ——二尺にせき金きんを漏もろらし  
傷いた而は延のびひ是いり對むか——見みつて右毛虫けいじゆ——左毛虫けいじゆと明あく——  
年經ねんき——養なの人物じんぶつと爲なすんも宣言せんげん——ハ思おもひもどもどき  
折生おり成なの活は——上野うつの寺院ていんの庵あ——養な馳は——元もとせせ——  
古いと無む——ちとて櫻さくらの堂どう——御聖ごせい白しら衣きと拂はて

見しに馳の形ハとけ共と右寺院の後

吐一ノタリ

但腰の足の指前向るハ通例之女之れとうと  
ゞ指先と後ろ向たり腰ハ必持との事と考の

諸々一他坂部被別お活りなり

ト云くは故にわ遠有るもと思ふる前象の腰と

ちつゝる腰ももん指先の後ろ向ひうりや然たり

腰と如くを役事行ひ

大峰林の事小八巻より記。色又腰と大峰と  
接ちる事多き事より記。色又腰と大峰と  
接ちる事多き事より記。色又腰と大峰と

記置あり

卷五

腰に大陰裏着てモ鷦鷯の枝り替りする事

附大陰裏の事

市谷田町四丁目字井戸小海野景山と云圓易觀相小秀

大陰裏

三ノ六

する賣ト者まほ者生而ハ甲州か一中年にて伊豆  
浦り久安住處へは時景山の深家に施事腰裏り  
入候て大坂毛あさ糸ふすと裏り入たる程ゆく形ち  
かくして是と前の方へ廻て健一居らく頭から腰丸  
の方か一ある前より見ると身仰ハ腰裏り腰毛く  
見えざる程うりと俗く外のり業ハ行面うだふゆと  
腰裏と腰との間うりもと仲く腰後一面りく自由よ  
手腰裏と送つて高ひてよ烟りと云く居ると  
なり或年土月二百の秋の事即ち大陰裏の裏の  
方にね夜の身拘束者多く腰裏ハ腰裏行役ひ  
太勢弓算り地乞と腰裏と腰裏と腰裏と  
腰一腰らしく一腰二門うちあはまく大正の末席のを

同より皆御のまじめ櫻原よりちと云ひ事なまくは  
折り改名之初より生娘のまじめ入る時よりあり  
景山とよす御とばはく教り承り生母の所へ立寄り  
相談の所よりて名主教きくや相手もハ余り見ま  
ナシト御おに五面友よ賣つゝは其まきやと云被者笑を  
主相松門御と伊豆の國中ゆくの多也うりふてあやま  
みくはうきよせぬニキアリモ賣つゝをせよやうと言  
イヤ支々も一廻り無づくと云イヤノ、中々廻もと  
り故彼景山又教よ御と源と源とやうの程成主と名を  
音あゆみ賣つゝ支う逆にゆきうと誰も買はず中と  
又賣へどもゆきうを思ひ切へ教と宣へりんと



主事の事へ、松前ふらりとまわるの四日を神主居主様の  
御ごとく、腰へ上げりて、一ツも生せぬ、太刀一箇よ  
りもとお賣買の約束す。後皆おこに歸らぬう  
御ごとく、主役を主ひ軍馬十人、痛く出でま國よ  
候。うち、城後山と大糸金程小坂へ難波せしとぞ又  
かきは丈六八目へ、腰に玉から城へ二年後とぞく  
平の山へ、バ先御と活けと、遠近(上)下  
せしはさとどりの後主の御と大糸へ、城主とども  
おのの儀ニケ一程の御へりたるのみかと跡へて二箇  
かハ物もあらず消滅せりものやつりまことれり也よ  
思へど、云事も知へど、來よ船ぞ東角思當事  
又端々魚を本船へ、戦士とせぬがつゝ又若事と

能あつてハ勤てもまづうが宣トキ候名前をあそう  
空氣へと今ハ高きより景山と傳リかの爲氣を  
國初より多じに戸一を席ゞて昇るゝを候事  
是と以て時々かの宇治拾達ノ衣の顔よちひが  
痛ち窮アリハ木の枝やようもて寫りくる小  
鳥の鬼どもの風り一舞遊び聲よ出一舞うか  
鬼どもの風り形つ又心あるべくましく樂よ形う至  
る一鬼よ痛と振るまく常の顔くらうなり  
お隣の巣のたうの類アリ又形う痛けりうるう事と  
差し主へ先の蟲よ幣りくのによれ一鬼どもに  
筆へと落ほせりとわゆふと奥うとくうどううてどう  
至一貨の痛ハ強せりやべ投骨をバ又痛と

一ノ増りの事と爐くハ云難一又戸保乃丈墨丸と  
ニ本多一前え徳年間の本山や東海道戸塚宿に  
大軍丸の乞食と云御り小又ば寄り明和安永の頃  
よりにや二代目の大毛と云事和須連を存命つゝ  
まことにや五供心り云父の坐す云能吹之又鳴く  
せんだせ戸塚の金毛と云流り唄りもううひ花もき  
玉のくきうねり歌うく吹打よげとちもくもきもきの春  
二三斗やどき入廻と云表の伊豆の毛よハ中  
ひじ色の毛と本と思ちる海毛ともいふ色一ツの本裏  
河り朝の四ツ比より人半比近ハ高さ丈より又別  
前より城くハ高さとゆと様ゆくある程と云春  
と首うねく往かへ歸り又朝出奉りて傍く株生

四ツ頃りと十石に大さうさせ一虫或年紅毛人毛りの母  
は毛と見ゆくや被ハ更り不便の事と水と多く  
治療と成きゆく毛と稱されと云せり毛の乞食  
言くや根心志と云ひて毛と云せり松毛の葉も珍  
幸より今ハ法衣のちげと澤山ア施戒更  
に復と安穩り奉ひりと治療乃事ハ免れぬと  
あきりと喰傳へり海岡守の海道に居る事ゆゑ  
はきれ事ハ日本國中の小童毛と云せりぬとすり  
しとゆめ故ゆくはゆみハ通業ゆくゆく  
ゆく大毛のゆき色と云はれ茎の形と云ふ  
城くらり御よ祖と並毛とおうと  
たりと又文政三年と竟え一は戸九度坂のよみく

病氣の生ト入まふ乞食とお一昼夜食うり是の即ち  
茶武十人程の大生の主とし病氣後寝うり温毛く  
左の足リへば是股の血の色さ九並の人の腰の上り  
程も何うべし足首リゆりか一ハ細きども足のゆび  
とも肥太と形り血埋めぬる折り成廢すりを久合  
肌合をあら云戸塚の如く同ド事へば者ハ既とく  
能意とえ色づるすと神とのぞむからだよ身とてす  
重みモ外大活裏の乞食ハ戸塚も遊巡回あり  
本と音をども是を詠とすとすとすとすとすとすと  
山崎義成文化三年七月戸塚君色行せ時健本は  
席とあくまへ流裏のよリ鉢とあくまへあくま  
強と乞居うると見多めうり是ハ三代目の大墨丸と

見えうりとへ画うり



又云今和泉年に即く大物のも食はてぬ出來うりの

あさ木二年入籍もまことに又妙愛寺へ毛ハ病氣の如く  
入るるハうへ因病つゝえ畢たる脇より後悔の良便成  
病出来しとての事に何を爲とて故も病院へ大ま  
抵半逐り河のほとりのと成難儀せせ全く畢丸ハ  
列よ肉痛ひ中よ渓下をも或焉承の生ぬ檀の  
毛爲も首のなり

特人異女に逢うる事

市谷自謹院小西應房と云道心切玉も老矣うきども  
筋骨健少く朝後後也よ股も柔軟ゆく肩の柔と死  
本とまろ此と本の事を捨ひよせ働く事若く男ども  
うちハ過り増り終日動く處よ右院にて漫  
漫遊ノ本近佳生とす記載なば西應房ハ尾浪の園中鳴歌の

主の産み生れが年と待とゆゑ彈の國へ行くねん  
信州ハ勿論義濃加賀越前城中ふもとも山絶きて渡り  
ちねく鷺書へてよどむ所へて思ひ事もめら  
一に此時か傍も餘り櫻おもき故里へてゆく  
市谷山へ農の方へ渾へて而て事と明一朝  
ゆく瑞ゆくも鷺さんと晴と待居へてもゆき方の東も  
かへあへと想ひ小あはせ舉へて黙やあると四方と  
見立へゆると重と待居するに遇向の御谷山の方へ  
藤竹とあへる者と手折子竹とも見極りゆる事と  
不善に思ひく能く自分をバサツくは方と目撃て  
來まつては渕山へ候合を至つても女乃れうづきねす  
まへ新响方などに女のあり道理總くゆきと若

今此を運能形のどもこの變化り遣さうにて今ある  
ものと尋常のものに相違川内あるの後ハ  
此事より我運奈と是あぐふと今と運りて成る  
如きより去形天麿ゆせよ鬼形り家  
かよとあらんハ社一運ハ天よ但き  
一筋角う候合也成天麿鬼形くも一かようち殺  
えんと一ちゆう時用ひ後の速ひと出でて彼危  
近車トモ此みと侍居るに彼の車一石運奈の  
二ツ持居ル者身の車一石運奈の車女ハ次方に隣と近うり  
ありまよやか車と却て彼女声と爲て  
ひくらへ先拂地と止らるよ我ニア幸あらん  
勞く弟ひとうとありリ船をとる事あつべーす船

船ひきよハ我ニ幸本を穿えざりバト云す声玄  
あくやうに尋ねよがく称バ將人をガハ心も  
他にて女云トとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
船内主バ高嶺義壽がうた六七年のわ女へ船ども  
はう女へと云居うごく油舟うせぬ舟國をう見さん  
も便うや何をせよ實ひ人間へ來る所ア船を停ま  
かく計り船人間のわ本とあらうと奇くううううう  
方便ておれべとゆくゆくゆく思ひ居る故彼女  
又云う免爾我とあらんと思つるほども候合也何故  
も候うくも我ハ拂地うごくするううううううう  
而と静く吹きまくと云故重氣色たゆと旦ハ何意  
りと詫と笑べと御くある心とゆうううううううう

ひかる八戒と般田頼が竹村の竹原の娘を今すう十三年  
之前の七月の奉納の日が追きりての月へお送ひよ  
れに道ある因縁のまゝまほり入る山の神と城  
主り地と故ゆき者よりおととバ父母ハ是とあら  
玉自と我忌自とて常々起よ吊ひ供養うども  
終ふ事ご前も車船もよみがりと仰くまづ  
障碍と成れり我既アはくまく年どうてと候れた  
來年ハ陰陽の神と城と一級の昇進ともゆる事と  
承きりゆるに世七月八十三回忌よ面とバ又於くゆく  
佛事供養とぞ仰り我既と昂ひりアーナモレバ支拂  
障り城來年陰陽の神と城事叶ひ難いはまづ  
又毎よ告かとぞ思へどと告る事叶ひまく又誰もく

頼むとぞくとぞ仰り先と又母ア告焉んハ生孫うでハ  
仰と日頃んよとぞあり仰り徳よ形とあらむと  
何卒改ア行又母よ附面ア既よは事と告て莫ハ  
我なりト佛事ハさへ佛供一ヶ日其のまみ相よ傳へれ  
らきよとく女と先去つて障よ妻の思ひと射て支ト  
早く免ア序り持紫菴とぬと捨く徳別ア御との又母  
又母を初くかくと且ハ難と且ハ怪とくうとぞば女を  
出るハ十六歳の時ア西廬房の卒アハ三年後  
の事うきだとぞちとぞ十六中の女よ見えも岩紙の  
うやうめの本ハ人間とハ思へざりとい廢りことを  
考ふに仙女の岩紙の義姫が或ハ女神の御神考



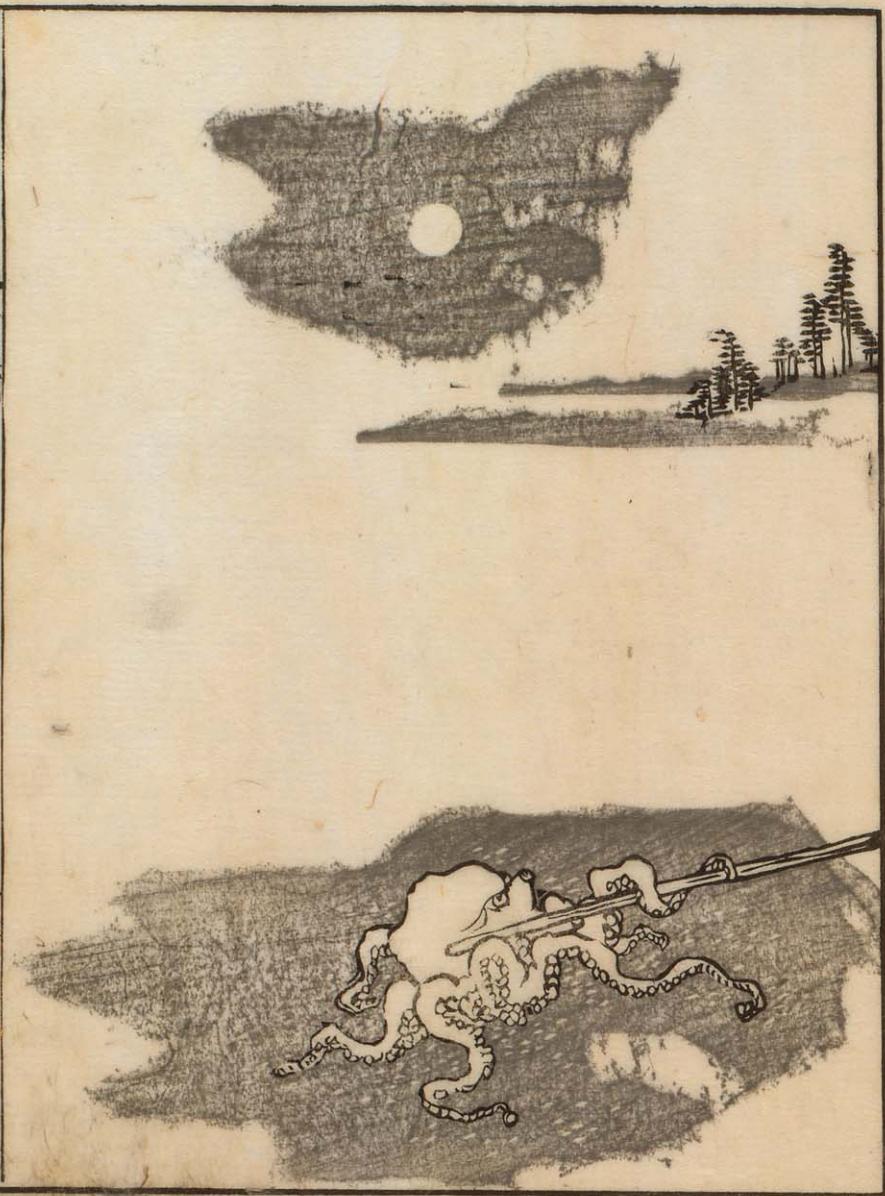
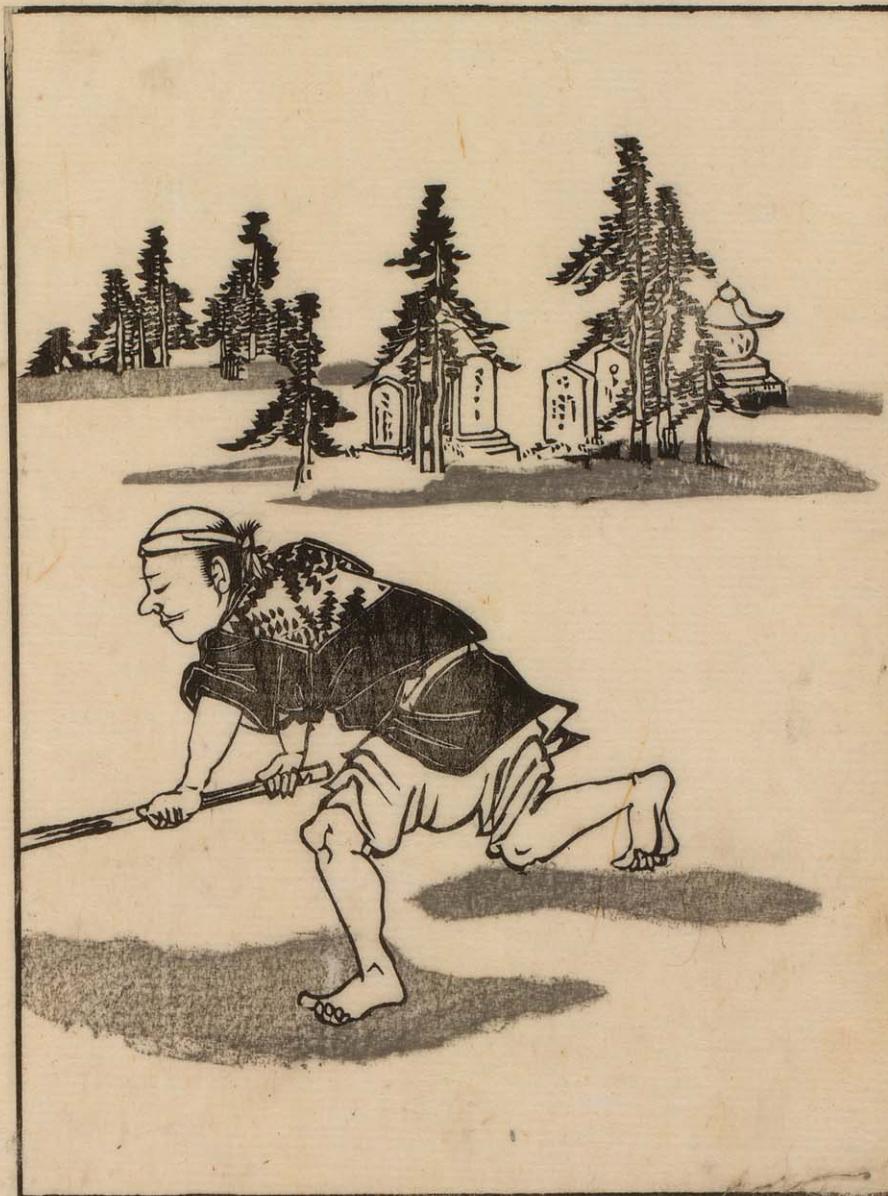
艶色を臺に浴へて身を射ぐ。圓じ華と目見えり。おは  
ウ女ひゆに之を徳の高命と譽め。我一命より  
朝事猛獸。雪と辛ひ重夜の命と死と業と死  
己の凶業と己の福とがこの酒。世はものゝと渴き  
慘事とぞして世と酒と。アレセ。由汝奉能  
心繩り徹せ。やもすり歎心。物人と處め  
後立出。武部甚吉とす。丈つらはくも本  
後り自強院へ。通の房と。身すりうり。若  
彼寺常親愛れ。終は傍の聲。驚く。事と  
置候。思ひ出かどり。十角よなまく。アラリ  
跡多。同院の張床念阿院。出典の初。未よ。此  
然初版。アドモ年月材の名うど。ハタキシトヤ

七足の姫死人を姫之事

特別役野那多々曾村飯泉村小山田村小山田村北西  
北三里と北西特別役七里北西大膳不敵北西惡體と嘗て故ち人見て  
食せば北西は謂の大膳也北西野ニ勝へ北西野參  
新薦の死人北西を招う北西がち北西行幸北西わざ北西ハ北西事故  
人又夫と初北西か殺北西と事北西を事北西と北西行幸北西  
波多毛北西北國筋又北西出船松前北西も北西東北海北西居候北西  
一丈も二丈と有謂北西思北西てたよ北西候北西て御至北西

海三ノ井の浦を尋常の浦とハ丈ひうきども  
アシナギトコ成るゝもの見面しづくすりは晴天更  
あと待ニ又立ち出野垂來り新葉をバ葉あ  
連表後片を是よ卷付若とテリ被支ト大蛇ヘ  
立ヒテアリの是ゆくちとあらうと拂ミ拂リ二本の  
足ゆく自由に立歩行ミモチと例へ運び捨ヌえのゆく  
云と拂て云れ餘りとくと海きの事射とバぬ地ゆ  
地而立事ハヤハヤ拂時リ拂寄ち拂と  
行ハス破りぬるゝや逐リ死難を汝ヒ何の若も  
の海中持行事とぞ山毛のち他山毛狼の新  
葉と場所死人と云行事ハ常との事ラモドキ色  
人少也小狼の狸葉を場所元引がうが天下またの根木を元引  
死人を接ひ事ゆくうの口が入間の參政事ニ山毛毛トハ

は是と敵ひ事の事ありてハ吉本極もくに  
裁きうる御を肩より腰より御事ありとまけ  
十人自也せと曰を死人と云ひ事ハ場發事へゆく  
は地づくハ謂の場事と基敵の事専局とすと之り  
謂の謂ハ事と早くもと扇びどくに人の源を多よと  
能か事と中と尋常ゆくハお殺と奉ハ出来ど  
仰りまことと云り一ツ内御ちば謂ハ必ず來ア道を  
らぐハ渾々勞故人又支とかり居事謂の謂  
來ア道を考へモ詠ア松櫟と前事と後彼ニ時  
晴と並びて謂ハま一文字に元事道を題扇  
櫻の中へ強め衰りむりて進退自由とひと過しもと  
枇杷の木の棒よりお殺と奉とを枇杷ハ謂ハ行く  
毒氣ア人別も毒氣ア人別も毒氣ア人別も  
謂復アハ所毒ア人別も毒氣ア人別も毒氣ア人別も  
今ニ都アハモニ市中ア往くハ



か夢を車ハ夢るを知ぬゝも多々も前も云ひ  
は物ハ鬼俎と食ひゆゑ若漢人アモリ自強ト猶セ  
事を時ハ禍ト遠方へ賣多モ車とてア能登鐵器  
ゆく蛇の化ト謂ニ七星ちりごとく是とくつも又  
蛇の化ト九星をそそぐアより一邊に向  
車トや蛇の精アマミヨコアハ魔と蛇變也

天色火のめく成する事

明和七年庚七月廿八日丙午辰未加酉未未  
引く着定後うちのど系スル日暮後山の方  
主都城下故地ハ大山半木ナリと  
たゞじの後天色赤く城の是ハツル成事アシト玉露と  
ちも内よち赤色同もめく名古屋の方へ蔽ひ爲り

後少々満天砂を拂ひて平一面より火のじるゝある  
處へ車中よね良の後のびくに居向ふと長と像をして  
自強とちくに御細。御と景つまめのめと鳥とありて  
何とも少り氣をもども馬とふとまほ御行う事也くひよ  
也行成行車ぞく思爰くも良の思ひとすと三  
割也く漸く小馬と御九つ頭りゆくとハ皆消え去るを  
勿縫物の故とぞと云ふとまど唯御乗車條りくと安  
かり一事ゆくとと無く又每の坐と安座と又び祖  
母鷦松遠翁ゆと能く吹びてするまく書舟をなすと  
竹腰某ハ育むゆ居する故天が一画りあく城下うき  
見立とし船内の者どもせしに何天が海へめりたる  
も又車とあく城下時よ起く見立べと云捨く

妙廣とお丈と能く安はよ前代未曾有の事にて登る  
モヤとおびあく成事ハ後代とぞあらずまだと年老の  
そりの事めぐら生産の不竟と城下と意南ぬ歎ひあ  
時とちくまドキ事とて在東の常くち生くと跡何ん  
ぐり一車と松遠翁の坐ゆく吹びて心清並腹と事と  
は日京地ゆく成の時頃とてかの方の室一面よあく  
城と村里の古事ゆく河と山の樹木と火舟と  
一噴よ燃登る勢ひと風えきとハシ大車牛車とまくと  
駒と出一而ハ竹圓うるん鞍馬のとてと口とバモト  
をく又着綾路の山とすと遡とぞりく小馬りて居る  
内とあら想く光りの紫條もえせり天のりん涙  
あと多く魏驥波りと思爰周くとも東西よ馳せ

遠の驕り主又いか行成太慶とてはく一也く立儀  
唐も驚き族とてす時移りくも極むるに至り其事  
人ふき坐とも以て見所するやうに赤氣ハ東の空より  
巡り極り見えく彼老り一條と極く小高くうり  
子の刻也テハ消失トシテナラニ森林の國トシハモ自内  
暮食トシテ高仰ひテ見ゆるかく夕日の  
落あく云居テ。國トシ極く亦一輝き出が傳ヒ博リ  
く海とハ血と謂ふべ。然より又本賀の國そハ首の  
英名に黒雲一もハ漏さに観聽トキえほのくと  
見えまうとも巴毛も夕日の輝きとてくらく  
見る中又目を奪へたり。殊盛り出く忽ち満天  
大の火と成り驚きとてうらじや又或記よハ日中の刻

か方のむすびに赤葉門を出でて東へ巡り承よりて  
左の赤葉馬場を諸州と照らし云又は日海にて大極の  
めもと氣天と対出。後より多き事年よ遍屬せり  
とと云行ともせよ東を松前の人の居るを西ハ長崎の  
人の居るも同。教くも都ゆくハ初ハ久く京の本  
朝人中よりあつて、之をうるハ大浦の嘗の火事  
をうるす。又和國より去り室を出  
の便りより水手ど流入も委ゆるよ送りての室完ひよ  
をもと立ハ人の住ける前よりえりて。傍くと見と  
て俗の隠り者大のもの居る時、人皆は完よか  
もと金と金よせ、ゆゑて自來恐る事よ云傳する故  
是ぞ藏のためのもの居るゆゑ世の滅ぼる期のあり

城一今之室宮り陽子の御事跡を  
支ゆるとて格別に慶安天慶うる毛ぞとて思ひ御の鬼も  
御ノ御ノ御ノやまうるは年を六月より八月とて御會  
雨也諸國大軍龜山御候せよとて支おの標尔も  
馬くもあらむとの事と

或書小松毛の國造剛那珠御内侍傍ハ佐渡の西へ  
向ひ名毛とて倭うる事保十一年の十二月廿八日  
海二十里四方一面ア城奉入へ六時半ハ前く  
降ア氣天より空中白雲ア成諸人内  
恐怖大形アモニ回夜ハ附トリ赤電扇ア城内  
聖天九日の朝アモニ漸消失テモニシ海色の微  
赤く濁ア加賀越中ももの外縫毛と義徒城本邊

義濃尾張伊勢三河三方筋岡山ハ右赤壁ア大太と  
見えテるト記一至先回船の事と見えテる天慶  
地妖ハ列々量りアムシのなり

油と嘗め女の事

やが高まる板本院の行某油と嘗め女よ出令アアリ  
驚きあるとの事故能勞と書化の文政九年の  
本のうれ日此男連立人との事アテ木原河原内  
本院一高須とうそに歸るよ陸のう天慶鬼多珍が  
霧もと一雪げて面落出アモニ日暮と成れどとて道  
と走りテゆりア親も前よりハ真の鬼とて  
漸たゞりて島内の高と誠懇りする時よりも鎮よ  
降あり少くともせんじて御まく持れアホ川の高内

入は新寫と云

故の事あれば

新寫の入は新寫と云

新寫の入は新寫

息とほゞ一に着てその紙と波毛も紙と板の下  
自ら  
海の波故  
奥の二間へ連行顔形ちもよき板室  
女と出でとバ酒うども波音く時もう門う色く  
雲板の聲りともううり御りよ光日ハ俄雨ふく客も  
多く故女ハ外の客のうえり蒲團被も薄く神り  
は産女ハ海中へ送りせ  
風雨を薄う床の下(波の漏れ)あづまうども  
まくく波く船を立つよばい外の種類の駕くもつ  
静うわのも絶馬く入ねどく船うたる故  
やううう女ひ來と侍居するも因よ波女ハソラ旅事  
ゆよハ重慶とれうけ本とくやと娘くやと心の内

少く思ひぬくとくかぬ顔く居くは女例へ居  
うり  
鷺の印く思ふよたよとく  
山毛行う僻の有女印く  
彼女又能麻たら松ふとたく  
能撃立く志ば考へ又例へそりと來く  
鸕く春うり又行燈の而へゆり又く撲立く故  
大車の客の方へ走く每うどん書りのうとゆり  
たきりく大口と向うくうく行う合意の行な  
目ともれとくとくとくとくとくとくとくとく  
顔よきとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
吸くとバ急ち首筋うり水とつと入うくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おとづれすよしとくに嘗てふ有りぬことも知り奉  
るを急難にあはれぬ月色がまし御車と云ふ御湯の  
獨歩の名入世太年もと能儀ゆく段やのまほとう年幸今  
舉くかきくめく妙猫太年もと油太年もととちうへ小敷湯の御言ふ  
えらうる思へに是ハ夢すとも即太年もと新眼花淫猫よ  
出會太年もとハツツ底事太年もとや獨保太年もとせよ右程太年もとせよ新  
人遠太年もと更度愛ゆ聲太年もとをうそつゝ今夢太年もとん  
と夢太年もと胸と落付太年もと見居太年もとよやく頬と出太年もとに  
めぐと故太年もと風情心太年もとまひよや初太年もと義齋太年もといぢ  
裏太年もと頬太年もと城太年もと根太年もと心太年もと——  
主太年もと者太年もと元太年もとよどみ心太年もと——  
主太年もと者太年もと元太年もとよどみ心太年もと——  
頬太年もと頬太年もと例太年もと被太年もととちうへ共太年もと爲太年もと入太年もと



と却故其物にまことに起へ廊下へ駆出ると女も  
車に付かりて木に引かれてからと笑ひよきば  
階すとくへもと先ゆくをゆうのと思ひてや  
み來りく階すのトみくにあらむと云ふと生  
生あり心地もわく力よ何せくのとくち満すと  
と女を考へ骨ある筋より腰をすく男も居く  
いは成事と云女もしの城本とソベドと耳をそくと  
部本ハハ何リハ西ノ筋を免れ候合を免れ一腰也  
アリゆくことなく着こ着こ着とも女も筋をせひに  
済りばくう般あらき者女とばくおまへの勧めくら  
画參故めんと云へば女も困りくら顏色くく行軍  
博多へ朝と居て少主とく城主とくう顏色と

大行燈の前より能自らとぞ心にまつる種うつみえ  
後の安息をよのぞううの義人ハ又もいふと思ひ  
ゆりて油引へれど懲り湯ぬうと云たば食  
前より是事り難く何ともせよはあと幸事うり難き  
却て外にて御と色へり傳へゆるそとあ  
相支へば女入や者も丸馬へり難く一昇の風情  
客船のものとすうわくすまむとおねがひ難  
ひのくらねりうりくへり思ひのとて不審よ思ひて  
近きとて雨の意承晴さへり今の妙めが目の  
前り来る心地へらう愛史うり在其隣といひてあ  
け事へと善人遊せ果てく云ふ事な  
えんじんわ能かと云ふ事をあくづりやと云及あよき

難儀（なんぎ）の女（め）は、まことにうそよ。意と前も先河（さきが）けく  
是（これ）より後（あらわ）頬（ほお）むりよ肉（にく）よ、歛ほ門（くわんもん）と思（おも）つ  
茶船（ちゃふね）だ（だ）も、中（なか）動（うご）き辭（ことわ）りの事（こと）もあは（あは）く  
又改（か）變（かへ）出（で）、矣直形（あれ直形）出（で）、後歛（こうくわん）人（ひと）心地（こゝろぢ）と成（な）る  
先（まへ）山（さん）も不審（ふしん）、黒（くろ）ひづれ（ひづれ）をも、也舊（きう）の色（いろ）と  
帮（はや）り見（み）るの顏色（おもていろ）とも、故竹（ゆきたけ）と、原さん今（いま）も隣（となり）  
居（ゐ）り、我貰（わしお）一女（めのわらわ）、何（なん）也（い）と、自（じ）身（み）えぞうく、起歩（おきほ)  
云（い）うちよかと知（し）ひ出（だ）、若（わらわ）の者（もの）も、おもと食（く）、故  
疑（うなづ）ひ不（ふ）い、ハ、うそ（うそ）ハ、うそ（うそ）女（めのわらわ）も、え津（あづ）と、嘗（なま）す  
アヘ（あへ）と云（い）故（ののき）を、學（まなぶ）り、而（が）て、居（ゐ）り、向（むか）て、三條（さんじょう）の、と、ハ  
有（あつ）居（ゐ）する、行（ゆき）き、ハ、後歛（こうくわん）、ハ、後歛（こうくわん）す、せぬ、行（ゆき）く  
僻（へき）の女（め）、皆（みな）、凶（きのう）暴（ぬる）き、うるさく、故（ののき）大（おお）き、を、経（へ）る。

事のへりあへまくらめへどもまご動審とて治りゆ  
たをじとあらむおれか一かくゆも廢材よりその法と  
母へつてはひてはひてはひてはひてはひてはひては  
たまへじとてはひてはひてはひてはひてはひてはひては  
藥へたゞくわづく猶口うづくわづくわづくわづくわづく  
ゆ爐りよると圓うつたづがわまきとや幸也と  
ゆゆと笑へえやくとててててててててててててててて  
う大氣ひうる幸へと始へゆもとけ更と又能うに  
元東衣女ハ生も能害能もゆく能中く世きの飯盤  
ゆくゆく者ふくらうくらどもの生びば多々多  
み飯りててててててててててててててててててててて  
たまども中く唯今う當せをあへと思ふへり得とも  
す時も済る心地もなく余裕ひとつせしむよらまよ  
河のゆき行つあはれ事ふも生産遺する者とその男  
具り坐へたり去影ぐ丈切へゆくうを裏の屋敷  
ゆく一世人えうねの名遠ゆく奴ぬうをへりとみ事  
ゆくも立らんむはせへりとみ友因着竹井へりとみ事  
立方の奥方には病もとの鳴の火盆アラ事ももとの落  
葉室立らむへりとみ事ももとの鳴の火盆アラ事もも  
基者りゆくとてはひの類アラ事ももとの鳴の火盆アラ  
ももくももももももももももももももももももももも

たまども中く唯今う當せをあへと思ふへり得とも  
す時も済る心地もなく余裕ひとつせしむよらまよ  
河のゆき行つあはれ事ふも生産遺する者とその男  
具り坐へたり去影ぐ丈切へゆくうを裏の屋敷  
ゆく一世人えうねの名遠ゆく奴ぬうをへりとみ事  
ゆくも立らんむはせへりとみ友因着竹井へりとみ事  
立方の奥方には病もとの鳴の火盆アラ事ももとの落  
葉室立らむへりとみ事ももとの鳴の火盆アラ事もも  
基者りゆくとてはひの類アラ事ももとの鳴の火盆アラ  
ももくもももももももももももももももももももももも